

伝えたい
残したい
わがまちの
誇り



ふるさと の情景

VOLUME

17

天野地区
(天野山金剛寺の桜)



金

剛寺の境内には、ソメイヨシノやしだれ桜が植えられ、春の訪れを人々に知らせています。その場所や数は時代によって変化がみられますが、今も周辺住民や参詣客から、桜にまつわる思い出話や聞き取り、寺の風景と桜の組み合わせは切り離せないものだとわかります。

花

見といえば現代では「桜」を思い浮かべますが、奈良時代には、万葉集におさめられた和歌の多さから、「梅」が対象だったことがうかがえます。新元号「令和」の引用元となった歌にも、「初春の令月にして 気淑く風和ぎ 梅は鏡前の粉を披き…」のように梅が詠まれています。時代を経るにつれ、花見の風習は貴族や戦国大名から庶民にまで広がり、その対象は梅から桜へと変わっていきました。

古

くから春の風物詩となつていた花見。古くは歌を詠む場、今では交流を楽しむ場として、人々に親しまれる様子は変わりません。



1 2 楼門横に咲くしだれ桜 3 多宝塔をバックに咲く山桜 4 北朝行在所の庭で咲くしだれ桜を見上げる

※天野山金剛寺へは河内長野駅から南海バス「天野山」下車すぐ。

ふるさと のひと

松本 健さん

金剛寺では、昔から境内を流れる小川沿いや周辺に、多くの桜がありました。私が幼かった昭和30年代、家族で花見をしながら、桜の花びらで髪飾りをつくって遊んだ覚えがあります。

楼門のしだれ桜は、昔は細くて印象もなく目立たなかったのに、今では、寺を代表する桜にまで成長し、感慨もひとしおです。

孫の世代にも、この大切な地域の魅力を引き継いでいきたいものです。

